

越後の親鸞聖人

大場厚順

目
次

「越後・親不知」

絵・デザイン 村田 直哉

■ はじめに……………	2
■ なぜ流罪に処せられたのか……………	6
■ 僧にあらず俗にあらず……………	10
■ 親鸞聖人の配所はどこにあったか……………	15
■ 越後時代の生活とは……………	24
■ いつ結婚されたのか……………	28
■ 越後の厳しい自然の中で……………	34
■ 「海」と親鸞聖人の思想……………	40
■ 思想と教義の深まり……………	44
■ 越後での布教……………	48
■ 親鸞聖人の「聖」性……………	52
■ なぜ関東に移住したのか……………	55
■ 伝承のなかの親鸞聖人と民衆……………	59
■ あとがき……………	66

越後の親鸞聖人

■ はじめに

私はかねてから親鸞聖人が流人として生活された越後国国府（現在の新潟県上越市）の近くで生まれ育ち、大谷大学で学び、聖人に思いをいだくようになりました。卒業後、郷里に帰り、一年に数回、親鸞聖人の伝承の地を訪ね歩き、聖人が舟で来られ上陸したと伝えられる居多ヶ浜で聖人への思いにふけりました。それが約四十年も続きました。

また、親鸞聖人の妻・恵信尼に関する史跡や伝承のある板倉町（現在の上越市板倉区）の高校に日本史の教師として勤めました。これも親鸞聖人にのめりこんだきっかけです。

私が大谷大学の史学科に入学した頃、三品彰英先生が主任教授をされていて、近くに下宿していたものですから、よく遊びに行つて話を伺

い、先生の著書『蓮如上人研究序説』をいただき、感激しました。その三品先生の紹介で藤島達朗先生と親しくなり、藤島先生から親鸞聖人研究の問題点をうかがいました。その頃、先生は恵信尼の研究に着手されており、後に『恵信尼公』（法藏館）という書籍を出版されました。先生は越後の事情もよくご存じで、「越後は真宗が盛んな土地なのに、そうなるまでの歴史は誰も研究していない」、そんなお話をうかがったことが、親鸞聖人と越後について研究をはじめめるきっかけになりました。

また当時、柏原祐泉先生が講師をしておられました。近世真宗教団史を中心に研究され、私はその研究方法に影響を受けました。そして一九五四年に大谷大学を卒業して越後に帰ることになった時、柏原先生から「越後に帰ったら各地の寺を訪ねて真宗の史料を探し、新しい史料を発

掘しなさい」と指導されました。さらに、そのころ大谷大学によく来られていた細川行信先生とも交際するようになりました。細川先生は当時、初期真宗教団の研究を進めておられ、後に『真宗成立史の研究』（法藏館）を出版されました。先生は現地調査を重んぜられており、越後の親鸞聖人の史跡・伝承の調査に来られました。そのことが私の親鸞研究に影響を与えたきっかけでした。

越後に帰ってきた当時、後に『恵信尼公物語』という著書を書かれた佐藤扶桑氏と、同じく大谷派僧侶で白銀賢瑞しろがねけんずいという郷土史家がおられ、共に越後の親鸞聖人を研究されていました。また美術史家で親鸞聖人の研究を受け継いだ平野団三氏だんざうという方もおられました。

その頃、恵信尼が建てられたと言われている五重の石塔をめぐり、

東・西両本願寺に所属する地元の研究者に見解の相違があり、仏教を中心とした宗教新聞である『中外日報』で感情的な論争を繰り返していました。

当時の研究は、近世末期の史料や伝承を安易に、鎌倉時代に結びつけて解釈していたような状況です。そうした状況を見ながら、細川先生や柏原先生から教えを受けていると、どうも納得しがたいものがある。もう少し客観的・学問的な事実に基づいた親鸞聖人研究ができないかと思つて、関心を深め、小論文を書きました。

そのうち、出版社から何か本をまとめないかと言われて一九九四年に上梓したのが『越後の親鸞―史跡と伝説の旅―』（新潟日報事業社）です。その後、主に『頸城文化』という地域史の雑誌と、中・高等学校の研究

誌『社会科研究』に論文を発表してきました。

■ なぜ流罪に処せられたのか

親鸞聖人は三十五歳の時、承元元（一二〇七）年に念仏弾圧により流罪に処せられ、越後国に遠流おんるになり、建暦元（一二一一）年に赦免になりました。したがって流罪の期間は約五カ年でした。その後、聖人は二年ほど越後にとどまりましたので、越後時代は約七年間でありました。

この越後の親鸞聖人を考える場合、承元元年の念仏弾圧の時になぜ師・法然上人と共に流罪に処せられたのかを考えなければなりません。

かつての研究では、親鸞聖人の妻帯が原因だとよく言われました。しかし現在の歴史学界ではそうは考えません。当時の僧侶の中には妻帯し

ている者がおり、法然門下で妻帯している弟子は他にもいる。親鸞聖人だけが妻帯したなどということはありません。

流罪の原因として現在よく言われるのは、風紀の問題です。法然門下に風紀を乱す人びとがいたということは、多くの研究家が指摘されています。そうした法然教団の性格をもっと明らかにしなければなりません。そこに迫ったのが、『源空教団成立史の研究』（名著出版）を書いた吉田清先生です。法然教団の下層の部分に、いわゆる念仏ねんぶつ聖じり的な人が増加し、法然の念仏教団が隆盛をきわめた。それが旧仏教に威圧感を与えたのではないか、という説を唱えられた。そうした点をもっと明らかにしないといけないと思います。

では、法然門下の中で親鸞聖人はどんな位置にいたのでしょうか。そ